はじめに

石川県は多くの伝統工芸品の産地を擁する全国屈指の県であるが、近年生産額は大きく減少し、厳しい状況が続いている。産地では、産業、経済、雇用等の基軸である伝統工芸を高度化し、地域の活性化を図ることが求められている。

その核となるのは人材育成である。伝統工芸と先端科学技術の融合を図り、同業種・異業種との積極的な連携を進めて、消費者・利用者のニーズに基づく新技術や新商品の開発を牽引する人材が必要とされている。また、問屋や各製造工程等に細分化されている業界を牽引していく人材が必要とされている。今後、これらの人材をどう育成していくかが重要なテーマとなる。

そこで、過去に伝統工芸産地の中で起きてきた様々な局面（技術革新・社会的背景・文化的背景・人的要因・伝統の継承等）にどのように取り組み、どのように乗り越えてきたかを調査分析することが本調査の主たる目的である。

今後、伝統工芸産業を担い、地域の核となる人材を育成するための資料作り、20世紀の技術を21世紀に繋げる足掛りとなる資料の作成、またそれらを支援する「石川県伝統工芸イノベータ養成ユニット」の基礎的資料を作成することを目標とする。

焼物の産地として、九谷焼（石川県）、伊万里・有田焼（佐賀県）の２産地を、漆器の産地として、山中塗（石川県）、会津塗（福島県）の２産地を調査対象とし、これまでに実際にプロジェクトに参画してきた事例を含め、広範なネットワークを活かして、公設試・作り手・売り手等幅広い視点から調査対象を選定した。

調査方法は、産地の現地取材（撮影・ヒアリング等）を中心に調査を実施した。特に革新的な取り組み（先端技術との融合、新素材の活用、素材の見直し、新規用途開発、異業種交流、ブランディング等）においては実際に現地に足を運び、より深く掘り下げた調査を幅広い視点から実施した。加えて、過去の歴史の中で起きてきた様々な局面にどのように取り組み、どのように乗り越えてきたか等の実例にも着目し、人・歴史にも注目して調査を実施すした。

なお、本書は文部科学省・科学技術振興調整費「地域再生人材創出拠点の形成プログラム」の支援を受けて作成されたものである。ここに感謝の意を表したい。

文部科学省・科学技術振興調整費
地域再生人材創出拠点の形成プログラム

ii　陶磁器と漆器

陶磁器 ： 九谷焼、有田・伊万里焼

本調査は、我が国が戦後60年、終戦により疲弊した物資不足の状況から立ち上がり、高度成長、オイルショック、価値観の変化等の社会現象や経済情勢が変わる過程の中で、日本の伝統産業がどのように活路を見いだしてきたかを探究し、産地の歴史を調査することにより過去、現在、未来の時間軸における透視を行い、人材育成、商品開発、市場計画、地域ブランドメーキング等のために役立てようとするものである。

日本を代表する高級品陶磁器の代表ともいえる九谷焼と有田・伊万里焼は現在共に上絵付け加飾を中心とした高付加価値を特徴としている産地である。

市場や商品も、最高級献上品や高級法人ギフト等の歴史も古く、今話題のプレミアムブランド戦略等における素材開発、技術開発、市場開発（マーケティング）の重要なキーワードが多く含まれている。特に他産地や異業種とのコラボレーション、新しい視点に立ったデザイナーとの取り組み、海外富裕層マーケティング等にも学ぶべき所が多い。

さらに、今後ますます問題化しつつある環境問題や、燃料・原料等資源の高騰から、直面する材料の問題に対処する産地のあり方にも、大変参考になる意味深い所見が多く見られた。

漆器 ： 山中漆器、会津漆器

漆の英文読みが日本の総称と同じ「ジャパン」と呼ばれるように、日本の伝統的工芸品の漆器は、我が国において独特の技術的発展をとげ、まさしく日本を代表する工芸品としての座を保ち続けてきた。

中でも、石川県の山中漆器と福島県の会津漆器は、生産量において国内トップクラスの産地ともいえる。特に物資不足の時代からギフトブームの時代までのプラスチック製を中心とする量産漆器は、百貨店の漆器売り場のワンフロアを占有するほどにまでに至ったが、ライフスタイルの変化やギフト形式の変化にともない、市場も縮小し、産地売り上げも現在は低迷しつつある状況となっている。

国の政策としても「ジャパンブランド」と銘打った政策に各産地は取り組んでいるが、カンフル剤としての効果はあると思われるが、長い視点で見ると持続的な産地活性化の柱となるには難しく、海外市場を含む販売チャンネルの拡大や、マーケティング戦略の拡充が求められている。

古来から伝わる木製漆器の伝統的な技術に基づいた製品については、時代の背景による変化は大量生産品に比べて少ないともいえるが、技術的に高度で地味な仕事が中心となるため、後継者育成の点において大きな問題をかかえている。

また、基本材料となる広葉樹系の原木はますます入手が困難となりつつあり、環境問題が激しくなるにつれ、さらに大きな課題となっていくことが予想される。塗りの原料となる漆採集のための資源についても同様、そろそろ植林事業等の運動との連動による長期的な方策が必要となるだろう。

目次 iii

九谷焼 1
- ○ 石川県立九谷焼技術研修所 2
- ○ 久谷焼上出長右衛門窯 4
- ○ 清峰堂株式会社 8
- ○ 株式会社九谷美陶園 12
- ○ 石川県工業試験場九谷焼技術センター 16
- ○ 石川県九谷陶磁器商工業組合連合会 18

伊万里・有田焼 21
- ○ 有田町歴史民俗資料館 22
- ○ 佐賀県窯業技術センター 28
- ○ 有限会社しん窯 34
- ○ 有限会社李荘窯業所 38
- ○ 肥前陶磁器商工協同組合 42
- ○ 佐賀県立有田窯業大学校 46

山中漆器 53
- ○ 石川県立山中漆器産業技術センター 54
- ○ 川北良造氏 58
- ○ 株式会社アイプラス 60
- ○ 有限会社大蔵伊右衛門商店 68
- ○ 株式会社大島東太郎商店 74
- ○ 鹿野漆器株式会社 78
- ○ 有限会社三波漆芸 82
- ○ 山中漆器連合協同組合 88

会津塗 95
- ○ 会津若松商工会議所 96
- ○ 市橋漆工芸有限会社 102
- ○ 株式会社坂本乙造商店 108
- ○ 鈴善工業株式会社 114
- ○ 株式会社福西惣兵衛商店 120
- ○ 会津若松技術支援センター 124

おわりに 130